

大学図書館とライティングセンターの協働による効果的なライティング支援

小林至道[†] 中竹真依子[†] 天野朗子[‡] 近藤泰弘^{†‡}

[†] 青山学院大学アカデミックライティングセンター

aoawc_contact@agulin.aoyama.ac.jp

[‡] 青山学院大学図書館

抄録

本稿の目的は、大学図書館とライティングセンターの教職員が協働して取り組むライティング支援の効果的な方法論について、事例をもとに検討し、そのモデルを提案することである。分析には、2018年度前期に実施したライティングセミナーとライティングセンターにおける個別相談の利用実績データ、利用者アンケート、インタビュー調査を用いた。結果として、ライティング支援の利用を促進するためには、教職員の専門性を活かせる役割の分担と関係をはかったうえで、適切な支援実施時期・時間を設定し、コンテンツを提供していくことが重要であるということが明らかとなった。

1. 研究目的・背景

本発表の目的は、大学図書館とライティングセンターの教職員が協働して取り組むライティング支援の効果的な方法論について、事例をもとに検討し、そのモデルを提案することである。

社会の情報化・グローバル化の進展に伴い日本の大学を取り巻く環境が大きく変化するなか、大学は学生に対して従来と違った形での学術的サービスの提供を求められている。大学図書館が置かれている現状もその例外ではない。図書館の一部をラーニング・コモンズ化したり、情報リテラシー教育、レポート・論文に関する支援・セミナーなどを図書館が主体となって提供したりすることは、その一例といえるだろう¹⁾。そうした動向が全国の大学に広まりを見せる一方、「ラーニング・コモンズなど学習支援のための場所は作ったけれども、そこで何をどう提供すれば学生が集まるのかよく分からない」、「学生の居場所にはなっているけれど、そこに主体的な学習が生起しているとはとても思えない」といった具合に、サービス開始後の苦勞が絶えない大学の例を見聞きする機会が少なくない²⁾。

こうした現況を鑑みるに、大学図書館として、どのようなコンテンツを提供することが学生のニーズ・実態に合っているのかといったような、学習支援サービスの中身に関する実践的な研究成果が、これまで十分に蓄積されてきているとは言いがたいのではないだろうか。

そこで本研究では、大学図書館とライティン

グセンターに所属する教職員が実施したライティング支援に関する事例について実証的に検討することを通して、教職員の協働による効果的なライティング支援のモデルを提案したい。

2. 先行事例の整理と本研究に至る経緯

正課外でライティング支援を組織的に行っている国内大学の先行事例は、その組織体系のあり方によって、いくつかのタイプに分類できる。代表的な例とともに挙げると、第1に、独立した機関としてライティングセンターを設置する例（早稲田大学³⁾、津田塾大学⁴⁾、名桜大学⁵⁾など）、第2に、高等教育研究開発機構などの取り組みとしてライティング支援を行う例（東北大学⁶⁾、大阪大学、関西大学など）、第3に、大学図書館の一部にライティング支援を行う場所を設置する例（国際基督教大学⁷⁾、広島大学、筑波大学⁸⁾、前橋国際大学など）がある。

発表者らが所属する青山学院大学では、大学図書館に併置という形で2017年10月にアカデミックライティングセンター（以下、AWC）が新設された。上記の分類に照らせば、第3のタイプに最も近い。AWCが設置される以前は、図書館職員（主にレファレンス担当者）が正課外のライティング支援を行っていた。しかし、マンパワー不足によって図書館職員本来の業務が過多状態であるのに加え、決して専門とは言えないライティング支援を行うことに伴う困難、そうした状況下でも開催したライティングセミ

ナーが思うように学生に響かないなど、図書館職員の苦勞が絶えなかった。こうした経緯から、AWCにはライティング支援の専門性を有する専任教員が新規配属され、図書館職員との連携のもと、正課外におけるライティング支援が展開されていくことになったわけである。

3. 本研究の問いと主張・分析方法

以下では、青山学院大学図書館と同大学AWCの教職員が協働して取り組むライティング支援の事例として、2018年度前期に開催したライティングセミナーと、AWCにおける個別相談を取りあげる。

(1) 本研究の問いと主張

本研究の問いは、「ライティング支援の利用を促進するうえで効果的な協働のあり方とは何か」とする。ライティング支援の利用実績データの分析を踏まえ、支援の利用促進につなげるためには、教職員の専門性を活かせる役割の分担と関係をはかったうえで、支援実施のタイミング（時期・時間）を設定し、コンテンツを提供していくことが重要であると主張したい。

(2) 分析方法

本研究の分析には、2018年4月から8月にかけて収集した次の量的・質的データを用いる。一つは、ライティングセミナーに関する量的データ、利用者アンケートである。もう一つは、AWCにおける個別相談に関する量的データ、利用者アンケート、インタビュー調査である。なお、利用者アンケートはすべて無記名式とした。また、インタビュー調査については、同年7月末から8月上旬にかけてパイロット的に7名を対象に行った、半構造化インタビュー（1人あたり1時間程度）のデータを用いる。

4. データ

(1) ライティングセミナーに関するデータ

まず表1に、2018年4月上旬から7月上旬にかけて実施したライティングセミナーに関するデータを示す。セミナーの実施時間であるが、「AWC利用ガイダンス」は、4月上旬のまだ授業が開始されていない時期（本学では新生を主対象とした各種オリエンテーション期に相

当）で調整し、午前と午後に1回ずつ30分で実施した。その他は、6月27日に実施した「論文を書くためのきほんのき」のみ授業と同時間帯の60分間で実施した以外、すべてお昼休みに1回30分間（12:40～13:10）で実施した。

表1内の「利用者数」は、来場者数に加え、時間や会場（教室、図書館マルチメディア室）の収容人数の都合で当日参加できず、配布テキストのみを受け取りに来た学生数もカウントしている。「満足度」は、4件法で尋ねた利用者アンケートにおける有効回答のうち、「とても満足した」「満足した」を合計した割合である。

表1. ライティングセミナーに関するデータ

実施日	セミナータイトル	実施者	利用者数	満足度
4月3日～6日	AWC利用ガイダンス(計8回)	教員	326	-
4月16日～20日	図書館レファレンスカウンターとAWCの活かし方(計3回)	教員	63	-
4月23日	レポートを書くための準備	教員	84	94.4%
4月24日	レポートの基本	教員	85	100.0%
4月25日	レポートのための資料の探し方	職員	64	92.0%
4月26日	クリティカルリーディング	教員	57	96.7%
4月27日	引用のルール	教員	34	100.0%
6月18日	英語アカデミックライティングのきほんの「き」	教員	74	100.0%
6月27日	論文を書くためのきほんの「き」	教員	45	94.0%
7月2日	レポートの基本	教員	56	100.0%
7月3日	レポートを書くための本の読み方	教員	41	100.0%
7月4日	レポートのための資料の探し方	職員	38	100.0%
7月5日	引用のルール	教員	32	100.0%

表2. AWCにおける個別相談に関するデータ

	開室日数	利用件数	満足度	リピート利用者率
4月	5	27	99.0%	47.5%
5月	20	74		
6月	21	52	98.1%	75.0%
7・8月	21	111	99.0%	60.4%
合計	67	264	98.8%	51.3%

(2) AWCにおける個別相談に関するデータ

次に、AWCにおける個別相談のデータを表2に示す。分析対象としたAWCの開室期間は、4月24日から8月2日にかけての平日で、計67日間であった。表2内の「リピート利用者率」は、利用者のうち、AWCの個別相談（1回45分）の利用回数が、上記期間において2回以上の学生の割合である。なお、4月の開室日が少

なかったため、満足度とリピート利用者率については、4月と5月で合算した数値を示した。

5. 考察

ここでは先に、表1、表2で示したデータの数値を概観することから始めたい。ライティング支援の利用者数的には、どういった特徴的傾向が見られたのであろうか。ライティングセミナーやAWCでの個別相談は、受講したからといって履修単位になるわけではない。学生の主体的な利用を前提としているため、期待したほど学生が集まらないこともある。そうした条件下で、結果は実施者の予想を大きく上回る利用者数であった。たしかに、本学全体の学生数に占める割合では、まだ数パーセントの利用率に過ぎない。しかし、同様の試みをしている先行事例のうちデータを公表している他大学が、とくに実施初年度は数の面で苦戦しているのに比べ、本学の試みは大変好評だったといえる⁹⁾¹⁰⁾。

では、比較的うまく学生の利用につながった要因はどこにあったのだろうか。本研究では、教職員の協働が機能し、それが学生に届いた結果だったのではないかと捉えている。その協働のあり方として、教職員それぞれの専門性を活かした役割分担と連係が重要であることについて、(1)実施のタイミング、(2)提供コンテンツ、という観点から、アンケートやインタビューに見られた学生の記述、証言を交えつつ考察する。

(1) 実施のタイミングにおける協働

提供サービスを利用してもらうためには、まずその存在を学生に認知してもらう必要がある。加えて、単発の利用ではその効果をあまり期待できないライティング支援ともなれば、なるべく早い学年、早い時期のうちに提供サービスの所在を認知してもらい、継続的な利用につながることが理想的である。ところが、昨今は、「レファレンスカウンターやAWCにいきなり行くのは不安なので、1回体験会みたいなのをしてほしい」という記述のとおり、第一歩を踏み出す前に身構えてしまう学生が少なくない。

そこで、AWCや図書館の広報も兼ねた気軽に参加できるイベントとして、ライティングセミナーを実施したわけである。その際、学生のニーズに合わせるという狙いから、正課の授業

スケジュールとの関連性、図書館の利用に関する過去のデータを重視した。具体的には、授業担当教員や課題提出部署である教務課との連携のもと、レポート課題が出される時期や提出日に関する情報収集に努め、セミナー実施のタイミングやAWCの開室日の設定に活かした。また、「レポート・論文の書き方」に関連する資料の貸し出しが多くなる時期、レファレンスサービスをはじめ図書館へのライティング関連の問い合わせが多い時期を、過去のデータから割り出し、支援実施時期・時間の設定に活かした。

たとえば、4月に実施した一連のセミナーでは、新入生をメインターゲットに据えて、これから学生として過ごすうえで不可欠なアカデミックライティングスキルの基礎固めへと導けるよう企図した。また、6月中旬から7月上旬に、論文やレポートの書き方に関するセミナーを集中的に開催したのは、本学の場合そうした課題の出題と提出のピークが、7月上旬から7月末であり、その少し前の時期が学生のニーズに合うだろうという理由からであった。「大学に入っただけでいきなりレポートと言われても、まず何がわからないかもわからないので、このようなセンターがあることにすごく安心感を覚えました」、「ぜひ個別相談に行ってみようと思いました」、「早くからコツコツ論文作成を進めたいと思います」といった記述がアンケートに多数見られたことから、支援実施のタイミングは利用促進のうえで重要であることがわかる。

(2) 提供コンテンツにおける協働

ライティング支援というと、ややもすれば、「書く」ことの支援（添削など）に限定視されがちであるが、実際は決してそうではない。国内外のライティングセンターをはじめとする支援機関の多くは、ライティングプロセス全般の支援を前提としている¹¹⁾。ライティングプロセスには、「書く」ことばかりではなく、書くために必要な資料・文献を「探す」「調べる」「読む」「引用する」などの行為が含まれる。ところが、そうしたライティングの支援を、「図書館が単独で行うには困難なことが多くて荷が重い」¹²⁾という指摘は、図書館職員に限らず、ライティング支援の主体者全般（学生チューターを含む）にとって、当てはまることのように思われる。

そこで、本学大学図書館と AWC では、学生がレポート・論文を「書きあげる」までのプロセスで、教員だけではなく、図書館職員においても、専門性を活かせる関与の仕方があるのではないかと、という見立てのもと、とくに資料・文献の情報検索から執筆までのプロセスについては、図書館と AWC 間の行き来を推奨する支援を進めている。また、表 1 で示したセミナーのうち、「レポートのための資料の探し方」をレファレンス担当者が実施したのは、図書館職員としての専門性を活かした分担の一例である。

このように、支援にかかる負担の分散を役割の棲み分けによってはかる一方で、提供するコンテンツの中身という点でより重要なのは、支援方法の一貫性を担保するという点である。言い換えると、図書館やライティングセンターにおける個別相談の現場で、ふだん支援者が学生に伝えている方法と、セミナーなどで不特定多数に伝える方法は、当事者間で共有すること（たとえば、共通のテキストに拠ること、用語やその遣い方を揃えることなど）が望ましい。

以上については、「セミナーで OPAC の使い方を実践しながら教えてもらうことで、より気軽に図書館や AWC を利用できるようになりました」、「レポート作成について、漠然とどうしたら良いかと悩んでいたのが、今回 AWC での個別相談でアドバイスをもらいに来ました。書くポイントや展開の仕方を教えてもらい、今後の方針を明確にすることができました」というアンケートの記述や、「AWC での個別相談を受ける前に、レポートや論文の基本構成の仕方などを、セミナーと関連づけてやってくれたので、セミナーに参加した身としては、個別相談がわかりやすかった」といったインタビューにおける学生の証言からも、支援の利用を組織的に促進していくうえで、考慮すべき点だと思われる。

6. 今後の課題

本稿では、教職員による協働という観点から、効果的なライティング支援の方法論について検討してきた。今後は、利用のさらなる促進をはかるため、教職員の協働のあり方を発展的に構築していく必要がある。同時に、発表者らはライティング支援の利用効果の縦断的研究を進めているが、その成果の発信は、別稿に期したい。

参考・引用文献

- (1) 米澤誠「大学図書館の現状と課題」
https://www.kinkiinitia.org/wp-content/uploads/training/2018tra_document_0.pdf, (参照 2018-9-30) .
- (2) 呑海沙織・溝上智恵子「日本の大学図書館における学習支援の現状」溝上智恵子編『世界のラーニング・コモンズ 大学教育と「学び」の空間モデル』樹村房, 2015, pp.262-280.
- (3) 佐渡島紗織・太田裕子編『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房, 2013.
- (4) 飯野朋美・稲葉利江子・大原悦子「個別相談とライティング支援の可能性—津田塾大学ライティングセンターの活動分析から」『津田塾大学紀要』第 47 巻, 2015, pp.133-148.
- (5) 菅野敦志・真喜屋美樹「名桜大学ライティングセンターの挑戦：施設準備と他大学視察を中心に」『名桜大学紀要』No.21, 2016, pp.109-119.
- (6) 足立佳菜・鈴木学「学習支援者のための「振り返り」観点とプロセスの創出—東北大学学習支援センターの SLA 実践を事例として—」『大学教育学会誌』第 38 巻 1 号, 2016, pp.127-136.
- (7) 島山珠美「ライティング・センター：構想から実現へ」『情報の科学と技術』61 巻 12 号, 2011, pp.483-488.
- (8) 村尾真由子・松原悠・洪昇基ほか「筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動」『大学図書館研究』101 巻, 2014, pp.108-118.
- (9) 末田真樹子・堀一成・久保山健・坂尻彰宏「職員・教員・TA 協働による学習支援の取組—大阪大学附属図書館における『レポートの書き方講座』を中心に—」『大阪大学高等教育研究』第 2 巻, 2013, pp.55-60.
- (10) 杉岳志「一橋大学における図書館と教員の協働・図書館職員と専門助手の協働」『大学図書館研究』96 巻, 2012, pp.16-22.
- (11) 太田裕子・佐渡島紗織「『自立した書き手』を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識—早稲田大学における実践事例と PAC 分析—」『Waseda Global Forum』No. 9, 2012, pp.237-277.
- (12) 上田大輔「広島大学ライティングセンターが行うライティング支援」『大学の図書館』37 巻 3 号 (No.532) , 2018, pp.32-34.